潮来集　一草編

寛政九年成

世にかくれたる人の後乃よもすゑまでつたへかまほしぞ
むかしより花鳥乃はかなきひの家のおもむきをしるす也
略しまさに芭蕉の翁も此一篇一冊の我が
して杖銭をし草鞋をはきて泉石のあたりに旅を
ことを好しをねがひしてたゞ花鳥の心をいひつくし
西上人の料撒をもつて人とあそびしこといふも乃芦の

かゝ無哉ゝゝして葛飾乃野人友来美記而の
言ゝ於のごと有せゝん

寛政癸丑冬十月

潮来集巻之一

懐旧之誹諧

旅人と我名呼れん初時雨　一草
冬ゝ無ゝもゝゝの千葉ゝ冬料　智廣
田の面の子小笹山崇刈原で　希聲
汐川も幾ゝ月の昇るらん　阿量
狩猟猶子物喰ふ声の秋の風　五粒
羅ゝ程にかゝ無ゝ以ゝ湯のさき

きるの舞ふ空ハ巴の剣六七分　吉仙
通りがゝり見し嫌のさの口　橘千

ウ

今さらに橙蒄ゆる矛の花す　休保
甲斐の根雪に見て瘦しや　可文
むく法まうき毅の竹の手洞捨ち　揖浦
再のぞぞ席る あや七本より　玄丈
喰やみて何中の花る濱の堂　鳴子
馬て逆する伊豆の石より　渭橋
浴衣手拾ひも以ふ人を見て　桃里
鯉法そる桃 梅のさ法ぞ経　木公
落ちもて文婦雀の鈴経よ　籟如
神子断かな蚕 乗て形り　文希
剛力の鉢も書てある岩の　江月
すみきる水干曉の雨より　潄江
經沿小屋の月に書笑句して　其草
うとく巌さの八ふる艸　執筆

右一順下略

五十年来ふりて秋小ふ[illegible]　保

花のふる鹿島も絶ぬ雌ごろ　草

きびすの清けし秋のくれ　魏草

古人三句

一草	七	智廣	六
休保	七	可文	六
五粒	六	魏草	一

潮来集巻之二

冬

時雨しや浦人やくらき里のあと　江都 長翠

夜の雨ましめ孫をまつ秋なり　白雄

山ふきて道ある根に入て晴ぬ跡　也有

時雨行く色ふ嵐して浦の家　潮来 一草

朱欄川や桐の木の葉ちりし秋　仙臺 可文

神さびたる夜のかたち降ふり里　上毛 見方

三日月やきて道さしめ枯木槭原　大樗

のちの日や深芦の上を行時雨　上毛 五調

象潟蚶満寺にて

志ぐる日ハ蚶（きさ）ひろふ石の間　古人 篆丸

時雨せしまゝや芦師の莇の上　江都 柳義

志ぐるゝや松に揃ふる山かげ　、一成

八重垣や鶴子鶴鳴す枝の秋　古人 保吉

志ぐれ人として陰風や一むら　上總 三尾

乾鮭に翁佩ぬてしぐれけり　安達 萬象

神ゝ秋乃手よりて雲に入なる　、秋夫

芭蕉翁の一枚活て時雨けり　秋田 白篤

三日の月志ぐるゝ雲にかくれ也　古人 路九

志ぐるゝや火桶かゝえて一移り　南部 東芳

汐るゝ方や路田の川面ゝ川時雨　、哥泉

時雨さゝや簾に二つ三つ蔓さけ　、和角

降るかもる雪や雪より松の敬　秋田 五明

二番鶏ふるや雪の五六尺　南部 陶々

十月や山のうけより雪の山　仙臺 也兎

明ぬらしや行のしゝ出て雪の寄　、萬寸

高山の雪やとくみて日ハ暮し　越後　汶南

かりのやしろにまかりて夜の
ものうるさしおもむきをきこしハ
其あるものの首なれ

さゝ川や枯しまゝ客を雅室　南部　北達

雪の夜や焼火に鈍く猫の媒　上毛　一草

山寺や鐘に清まてハ雪の降　常陸　椿臺

暮さゝも取く降雪の暮れ哉　古人　智廣

夜あらしも知つてあつらん後の雪　下総　呑溟

暮れても常のけ松の雪あらし哉　鵈牛

上野の旅行して

馬士が案内ひ行てきさらぎ雪の暮　、存阿

楮より上信雪のくらみ哉　上総　天年

雪水を走て世状踏ふ袖席哉　潮来　古仙

雪の奥火を焼後家入ておる　古人　春圃

枯芦のふしく高し霰の声　讃岐　朱雁

霰の月山の中里さびしかし　江都　みち喜

人なりてまゝ眠りる霰の露　、宗讃

春さへけふの幸さらふ霰の飯の哉　、葛三

園の宿の何にか早き枇杷の花　南部 東渚

茶の花の淋しきうへに神無月　銚子 至岡

霰ふり川除て新開の摘菜かな　松前 ちよ女

凍蝶の浮かれて落しけかな　常陸 少補

霜に松ふきおちて氷る小雨　上毛 其雲

痩馬の野髪にかゝる氷かな　、 沢雉

木兎の鳴に浮ぶ月の明りかな　、 百几

日和よくふるや垣のこほりかな　南部 風馬

霰降や月に追れし小松原　水戸 雄姿

朝川や霜ふたし姿に浮ける鳧　仙臺 麋々

冬の夜や海鳴きて山静かなり　秋田 月道

長庚や枯野に落る風の声　南部 文操

日の上を寉の声ゆく枯野かな　、 其黒

笠の端に影月さへるかれ尾花　江都 素綾

弱法師の笠の上行枯野かな　上毛 琴雨

月に洩る影かくしけり紙衾　京 園更

衾からこゝろも出し涅槃かも　佛仙

寒さふや椎の根にたつ家の腰　上毛 柳雪

笠飛んで水に吹るゝ冬田かな　香取　文鳥

冬川や弓をさゝて渡る人　多賀　月川

十月や野里の藪に日のあたる　八戸　家文

吉の見や二葉吹かる園の麦　青蘿

風に隣の隔しき日なたかな　尾張　卧央

末枯や水田の水の畔を飛　鹿嶌　一草

吉の見や志音て鳴園の麻　木公

楷の火に影なくなりし庭の月　白石　乙二

桐火桶人来て字を奪ひけり　南部　素郷

炭の香や清らしく夜の宵心　、　蕉雯

炭の幽やよき松風のきこゆころ　作者不知

眼の前に蜘の下る巨燵かな　古人　平十

その思ひ清らしく崩す炭火かな　潮来遊女　あつま

蔦のうらみむかしを思ひつ枯にけり　近江　五束

かくこもの水に月さむ枯蘆　水戸　支理

けそくと霧に成りし落葉かな　秋田　春潮

水も鋤て野井に吹こむ木の葉かな　、　諷佐

岩山やしとふ冬木の枝の形　、　巴明

漁村や冬の木立の夕けむり　南部 紫蘇
冬枯や柳のもとの温泉の流　、星夕
夕されや落葉に志づむ蓮の茎　上毛 雨什
辻君に衣うつまもなき叩　大坂 旧國
たち叩あらしにむかふ戸出る家　一草
打そこね鳴し古寺後すら叩　仙臺 白居
宵の間へ世に流されし鉢敲　潮来 玄夫
加茂の灯をあてにし先に鳴鵆　暁臺
風そよぐや千鳥に添て川鳥　一草

鳥さへもちくりの中の松の声　南部 芦帆
根わけしや鵆鳴音捨ありしろ　常陸 洞五
吹川風や遊ひ来して新千鳥　仙臺 銭荷
汐浜千鳥こぼす鴨の狗毛かな　、佯庵
鷺冬の声何と松なせ紫葉将ん　仁都女 几秋
鵆さけて子ハあかりまる悼さかな　仙臺 存義
砂千鳥まつ霜走霜に雲鵆の鳴　佛二
檣のそよそよかさふく冬の日さしかな　南部 郭史
寒梅や忘れも見えぬ浦日和　相模 漣水

小屏風や窓に葉高く見さして
日のさちや菊やつく迄見よる窓様
起ふしのこゝろすむ冬この里
さつき戸に乾雛宿さされしらぬ
営こそ何そいひ知る節季かな
節季仕舞や人のこゝろを試して
引きしや再の中すぢ秋得と待
年の日の年の夜くらし知れまて
求め得たる物なし年の暮

仙臺 文之
水戸 南柯
、 雨麦
江都 寸来
一草
上毛 眠砕
南部 寸長
仙臺 福二
潮来 楫浦

潮来集巻之三

夏

早乙女の身をして衣之へ歩り
更衣蝶の黄なるも見飽る里
七瀬のめくる里入さる渡りの神

上野国吾妻の里にて

桑畑や追ての花々菱しき
けふの月の花雨宿しに旅にかり
なる花々につく澄して操へひとり坊

佛仙
陶々
相模 春湾
一草
南部 可交
、 葵文

我中やさしき雉のこゑこの邦　上毛 麦泉

卯の空や山窓の日のさしかけし　武本庄 双烏

うは花や翁根叠りの朝明　相模 燕寥

卯の空の夜雨ふるゝ小雨ふり　上毛 對湖

卯の空の暁ねぶりもひるまず　南部 家月

記部の九夜まち姫ほとゝぎす　白雄

十日あまり淡路をさしほとゝ時鳥　曉臺

木槲子雨そふ声やほとゝぎす　八王子 星布

月と我と今宵あきころも時鳥　上毛 亀嶋

千町田や朝ほとゝぎす霜に啼　僧 湖友

利根川のあとをとめて

松の戸や泊り鳥のほとゝぎす　一草

あるきしのほのえへとめて時鳥　水戸 文江

樹々の節ふりて声や杜宇　湖竹

嶽々や雲はきおちてほとゝぎす　瑞花

三夜啼夜をさりとくし時鳥　京 月居

声ありて待や暮音の杜宇　仙臺 巣居

短夜の満月かゝる蓬山の邦　乙二

咲くまゝ花見て廻る牡丹かな　江都　亀丈

散牡丹ちりゆく日を惜しき里　南部　景樑

やゝありて牡丹の下に起きけり　仙台　兮宇

芍薬に水もらひ来る隣の家　、　東鴻

日の沈む上に月ありかきつばた　常陸　翠兄

明星に花立ならむ葵かな　京　丈左

琴うちうる庵の桐も花咲し　武吹上　喬騮

守りなき園の罌粟咲にけり　紫石

美人草下手の画を恨むべく　水戸　東川

萬薇洩るゝ柏葉の匂ふ卯月哉　、　龍尾

手すさみに作りし笠は長きかな　上毛　如雀

翠雲に数ふる涼しさかけり　大坂　二柳

け畑やこゝらの葵も影透めて　伊勢　真越

濯足萬里流

蝸牛天に角ふる涼しさあり　素郷

かたつむり間ハ角を忘れし歟　秋田　一草

引子花時又待てひとり寺里　素道

揺あひて草のはなにうつるの兇　潮来　桃里

草木にも色に新し佛生會　常陸 麻牛

角力とりの手に美しや初茄子　南部 画柳

なにもまた容に竹の子伸にけり　潮来 滔橋

一陰やなにのものとて初松魚　千住 揣千

よし侍も竹の夕月なりけるを　尾張 曾雉

植て去る山田を鹿の通りけり　加賀 士朗

おくれるハ従ふ其のあの早苗より　水戸 一抄

堀を掘て早苗手ならく血の抑　千皆呂

早乙女のさびしのそれて通りけり　一草

葉桜や諸樓子もるて日の落き　古人 玉斧

麦あらし麦ハ夏に吹きとまる　南部 雪敲

肥えもて木に物のしきさうてく馬　宗讃

昼人手紫陽花取くるなむさら　八戸 乙因

青梅を噛て居る居士の戯に抑　下総 螳丸

去ところのふかか西の方成見か
小猿のあハさしくう労て
二七日そろふに中つけりそ

合歓の夕その子ところ道枝やなも　仙台 みち彦

翌しらぬ日もあまてあり合歓の蓋　物惟

蒼雲の海をはなれて月涼し　南部 竹市

涼しさ床はひろく天の高さかな　、 壺虹

涼しさやふきむかふ谷の雲　甲府 可都里

水無月の旭涼しく出る景　仙臺 豊知

我扉先ぬれ時のちらし種　信中 路人

扇とる手や団扇かざせる眉のさき　上毛 如布

あほさきおをあてなく月の戸ぼそかな　仙臺 鳫啟

四方より日に囲はれし蓮の花　萬寸

星の夢や蓮ちる音をうかせり　上總 晰孝

根本や勢ひ道の蓮の露　下總 白文

白蓮を志し心を向ふ余り　古人 鷺泊

手をのべて花をかたらふ蓮の花　古人 来我

蓮散て寂しき雨のそとめ哉　南部 守中

南部閑伴那賀田の玉川より五里余隔てる所に十府浦といへるあり其名にしおふ海士の住家やなりて

蓑の露は誰かなん姉か夜　一草

昼の床の夢し深く目ふさけ　水戸 鸚湖

夏の原ところ〳〵ハ馬に踏るゝか　仙臺　風丈

かゝる白露草にたまりて夜の蝉　秋田　渭虹

草ゆれて月見えて梛にむかふにも　上総　綠池

蝙蝠や夕影の宿の草にある　〃　灞陵

夕の原や丁ゝ寄の門を掃　江都　桂阿

瞿麦や太刀さく我に露のある

撰章　仙臺白石侯とや也

潮来集巻之四

秋

馬買の小笠に秋の立日哉　白雄

秋の月に接て堂ある柱かな　大津　菜二

こゝろなくてある如し桐一葉　古人　長松

鳥羽の稲もと見捨て一家あり　仙鳥

朝の原のまさき風に聲もく聲　南部　雛路

塵塚や雅ありて行出し　上総　亀足

朝の色や世をのこるる草の秋　南部　器重

灯火の丁子作るや星まつり　秋田 之竹

祭らぬ身もやつての盆に参る庭ん　仙臺 千賀

盆の市毛桃苦栗哭ところ　小蓑

亡母の三年五月の廿日虔陰
のまくらゆへて旅のものを奥
ともおもひ此 墓参にあふて

憐まれし人に押まて墓参　一草

毅游松原庵にて

むかひ火や上総へむけて月の雲　鳥酔

魚雲の親もめでたし生身魂　浙江

芒ゝ露や能白ひさる畔の中　素郷

露けしや暁かけて芒の柏子　日野 素兄

蜘の巣の夕露ぬ滲し羅生門　本宮 重厚

浅芒や露の上ゆく図雨　秋田 冥々

露を破むしの命もあき秋の　雙一

月さして虫もあるものゝ音かな　閑更

この虫の暑さも露の松ちる祢　雅神

虫の声中々ろさぬ世次明かり　南部 類巨

すゝ聲なし何のやあらんきりぎりす　萬戸

きりくすかに飛ぶ所見えけり　下総　京花

題艸庵

蜩や我まつつの戸のひらき　一草

雲のある野路哉高き日拵所　長勝寺　希聲

きり雨や豆腐吟るる舟の中　秋田　秋桂

物音も荻かのむこうも荻の声　佛仙

荻吹く風かき月の出かかり　滑原

月影や社の庭の艸の露　南部　守一

野分やかかる狼辺の風の下　〃　有以

稲さしたそ何なき小窓の芝蒿れ　千住　萎花

了秋七かり花々と時しも實の葩　水戸　蟾丸

旋霞登千我八時知る悦かなれ　市東

栗谷川覧古

風かかしこの二本の男郎花　東芽

山房のさびしくも鹿の涙るる露　暁臺

それ角や擲げつくて雨の鹿　信中　古蝶

鹿明く壮まで果かき松の風　南部　吐眉

夜のしや鶏鳴きて峯の鹿　〃　思朗

夕空やあ秋ゆゑ庵の山くるゝ空　下毛　孤雲

名月の雲に吠るゝや山の犬　成美

名月の此方ものし人通りけり　蝶夢

名月や捨子の親も出て来ん　一草

名月やあく抱ともしらぬこの栖　月川

名月や二捺くも峰も無紅葉ぞ　甲斐　石貢

病中の吟

淋しさの掛け捺けせんかた月一夜　白雄

月の秋淋しさまさるの扉かな　加賀　鹿古

名月や照らするその庵ん白あかき　秋田　素太

秋もはや三日月頃の何らし秋　数冬

兄弟重もみまかりし一七日に

十六夜や親子けなげに墓の露　上総　南榮

簑の町の出はつる秋て松の月　江部　菜明

月のこゝろ人名号で謠ひし秋　南部　素来

八幡山良夜

夜泊や老に肩寸山の月　平角

待よひも婦ゝきまつひとかな　陶々

けふの月見て清めてやさしく露かゝり　越後　桃路

世の人は雲をいとひ
うき所をしく晴る所
おもひのくまもなし

鳴いてく影あかゝる葉月の秋　可文

松島の志は見る月の一つかな　一草

姨山

昔のことをひのさらし形や西上人の
旅寝をまたひ晴るゝ紅葉の
西の当の我が形しふ

人の心を月をまつのこの秋の山　長翠

月清し命の中とうくま　信中　雲帯

鍛冶の眼の水に浮たるけふの月　鎌倉　百遊

横の裏の浮る小月の高見かな　木路

影さやに日とて流るゝ竹の葉　南部　買糸

あさましや月の筋汁に蚊の色　露菊

猿との形を結ゆく兎の影　潮来　蕎村

稲の八幡ともて形かへ　古人　義如

唯一羽形をむのくまにかけり　西奴

秋の葉や人動して通り雨　潮来　梅丈

物の音も迄志移えて秋の夕見え　尾張 羅城

秋の夜やひとり里邸の明治の泉　秋田 東枝

秋の空や晴ても月の色ゆるし　南部 如雲

遊ぶ雲や物蒼さきに秋の水　江都 鳥明

大川汐や舞出てある都鳥　、 完来

初汐の波路に来る稲の秋　秋田 三子

彩の声や萩の原る秋の蛍　、 五鈴

志つ岩や秋の日を鳴る鳥の影　南部 一草

秋の日や草に移ふ州の外　九西

三日月に追て秋の入日かな　上毛 梁々

馬場西や秋の日さしのむかふさき　秋田 知梁

秋の日や雲のきちきちて志は鳥　東渚

萬の家の雲津あるの秋日かな　紫兆

高館にて

山を越へ川を越て秋の風　京 蓼太

物おもへて旅人を吹あらの風　下総 定雅

志ら雲の天台山や秋のいろ　都本

風秋の音を分ふくむ稲田かな　下毛 百爾

月さす寺にさけ立あふ秋の雨　南部 卧央

物のふみにたよりて分し秋の暮　、吟耕

夕影の花いはれて垂る秋の雨　五交

海士の碇その根ハ海も志月かゝり　大津 湛道

砧うりや柿の木ふとし門のうち　秋田 友之

一ツ家の又ひとりある砧かな　南部 千巻

白家の月を待つに茶たうかな　、漣月

白菊も世に咲まて花のうまれ　信中 蘭中

志ら露や月与寝に影五尺　仙臺 又義

雨の日の日をたに浮れてうちまれ　下総女 やさし

人去て寺にむかひ咲ける菊の露　智廣

狭やまんと我又世の尺秋の暮　天年

利酒のさゝ廻りけり秋の秋　下総 既酔

人や我またまもその人あきの暮　南部 菜流

秋の夕晩ほとはらち浮し望　、大春

野菊やくるりとさしき秋の暮　僧 遅月

鴫立くのち鴫も知る夕かな　信中 麦二

百舌鳥啼て夕中のゝ梢のかな　、家副

渋柿も見事に赤くなりにけり　大坂　二柳

江の秋や一もと芦の水きは　上毛　花陵

うら枯の下葉を敷る野水哉　常陸　五竑

花すゝき末枯せぬ葉のさしの姪　僧　梵石

是ほどの人を清し御遷宮　上総　玉成

蘆筏や舞の上で小雨ふる　南部　左吟

三井寺の晩鐘きゝて後の月　近江　沂風

後の月垣にむ影ともなかり　京　支白

何事もなき月の形や十三夜　秋田　三千丈

後の月照しこそ□てまた□るみ　下総　阿仙

思ふさま起や人□□藕て水の臭　上毛　是牛

隠宝閑

かしの実の落るを拾ふ山ひとつ　星布

椎の実の打ちよるところや淋しさ　秋田　素雪

網手や菜の味清き若菜の音　下総　百二

今も見る龍や落る火でも秋　毅如

雄川や蠟夷（ラツイ）の来ぬ津の海　上総　稿車

あふれて何も秋のしやさしの子猪　烏明

松茸の大さ一尺五寸の秋　水戸八童 富松

持しらぬ神楽きこえぬなれハ　南部 放斗

ちらちら一葉に流て四方のこころかな　仙台 亀枚

嵐きまの枝定まる蒲に紅葉せり　一草

人も形老て紅葉の散もの秋　阿曇

夕葉や野分の後の梅もどき　潮来 凤府

組居てたのしむもせし秋の晩　磐城 吏仙

古郷へ人あるる面　秋茂来　南部 柑嬰

むつび合て小さきかや須可の秋　下総 素卿

潮来集巻之五

春

めでたくや旅人の名を若菜の春　一草

太箸やむかしの物のかざり数　春潮

万歳の烏帽子もつまむ心数ハ　兩什

さ浪やや飯に時去時来り　上毛 知二

蓍もやはる小出る松囃子　大坂 尺丈

立しかしの若水と云ふへり　一浦

粥草の今日一とつ八草もの秋　松前 佛仙

七艸に富士の山見るあしたかな　旧国

若やかに若菜の露ヶ駿河路　双烏

竹橋の足袋ぬけて来し野かな　上総 楚江

正月や夕飯すぎの淋しさよ　秋田 紙秋

赤積雪の正月に淋しさ　寸来

有明の若菜かけ合ふ野辺の林　蔦三

竹の中に鶯のさえずりをきゝあかず　古人 政二

鶯うけて梅ふところ紙の上　五明

咲うちて二ツ三ツの梅の花　成美

山里の梅さへおもしてもちかな　みち彦

松ありて浪もあらなる浦の梅　貞松

雪がくる月の夜の梅なき頃の門　一草

花見て嵐吹く野の梅の影　南部 浣素

火に小鍋て米しき里の梅　素綾

旅人の郷梅山に吹く年の春　仙臺 銕舩

梅の花梅のこぼるゝ月夜かな　圖毛

夕風や落ちる梅の影うつく　江都 求夫

梅の月むかし男のかくれ家　行脚 凡坊

黄昏のたつ音ふかゝし菊の花　少年　扇雀

道灌山にて

方八町うちひとひとり啼ぬなり　一草

鶯や蔵のうしろの松の星　南部　馬切

日にふれて鶯の音に力あり　世葉

鶯の音晴る東ふ似る月夜哉　仙臺　車閑

鶏子数日まで守り鶯の雪　几董

山伏の大家にすむ川辺の花　素郷

空のまゝむ夕や庭ハせまきまゝと　保吉

野畠の人やのきまきて豆志ろき　常陸　以水

さしあたりの手ふる散る霞かな　南部　巳千

猫の恋忘るゝ時ハまつまなき夜　渊澄

猫の恋止時ゆるふ飢疲かん　上毛　芳葉

孫子の恋柳の影をふみし堂　一草

風の柳人来るうちに沖のかゝる　春暁

桐ゝのうら夕御のころや村柳　仙臺　北風

すまひとしこ月柳のもとの水寒し　車来

青柳やさしも秘さる家の流さまさま　常陸　菱波

垣ゆひのくゝり柳も青みそめし　（武中瀬）此友

柳ありて人住ける家の雨にもなか　一草

春風の扨は嵐となりにけり　暁莪

木深のはや雪消て裸不二　（駿河）岌嵐

立あかる座の中より春の影　（京）青阿

春を吹風も払ふる海の音　（信中）團桂

春風や夕日の沈む鐘の声　智廣

きのふまで紙子かさねし二日月　鈴路

陽炎や柳にかゝる二月の夜　（南部）馬遊

二月のおもしろくし漁夫の岸　、乙明

きのふとや咲る桜もありし山　（大坂）外六

時雨語りありし
伴ひ来て

鳴きもせで過ぎて見れば花もなし　蝶丸

遊ぶ人も花のかゝる日の影なし　（秋田）石野

浦波や起つかすかに春の色　（南部）東英

鳥は雲に入りて見えぬは草の里　、言左

野風や野雲くもりて蝶の夢　一草

竹落や沢の水にそふてなゐ　、三白

北山や消のこりたる中川の里　南部 桂路

妹か家半山よりの匂ひの神　下総 無有

何人そ巾吹まきて山五加木　南部 一葦

そら豆の花半咲けり村つゞめ　巣兆

神ふさや蛙氏見もて橋の向　素卿

小田の蛙鳴きしても曲の水　平角

蛙啼て中川風家に落ちるの神　潮来 江月

かゝ川鳴蛙より落る戸口の雨　南部 素猿

涼めしもてちゞきのゆかれ中　少年 亀蔵

春雨の夜をもなく[illegible]遊山の朝　一草

かゝ雄鳥や紙雛清うる春の雪　、昭羨

人の来しても嬉しる春の宵　、至岳

春の夜のおぼろに河の明りかな　上毛 楓車

園ゆる花なき神ん像　仙臺 壮固

花の吹ちる夜は[illegible]波[illegible]　巳明

春の水あつまく見えて花に影　信中 如乇

春の水かゝりもて花に加小亀　秋田 青夫

蔵来るや稗田に遊ぶ家の[illegible]　南部 文明

月遠く猶なく清き高根の雪　常陸 休保

懐の錢百おもし春の月　武蔵 長翠

亀やらく湖に春めき春の月　思徳

ゆく清きて浦打人や春の月　上総 白馨

松に猶さしめて月を入れけり　斗城

おやおなじ節歳吹窓のむし　白坂 閑舎

ふしぎく風名ありて春の清さ　乙因

栴檀の林をさしておぼろ月　仙台 白麻

春の日に沙ら川みの小夜かね　上総 両律

春の日や石利にて暮る山の坊　南部 巳山

山笑ふ影さし入る床の日の卯　花明

眠る蝶恙なき世への慎まし歌　佛仙

見る床に小蝶巧しきあしらひの卯　鳥明

竹原やそその芽ふくま蝶の寝　江都 癸宇

笹の葉に起きて春寒春の山　素太

雀の子二王の掖にころけるに　上総 娯拘

松深く多寡を隔つの日のこの南　南部 甘柿

さし枝や梅咲の床る風の影　五跡

洗ふや石に衣脱く小田の人　、柏舟

うきふしの根かたに花の花　秋田　嵐児

蝶飛て風苗代をめぐる秋の中　、蒼悠

苗代をこの春てもえるや蛙の艸　、吾長

眠るや瀬うちかけはたるのうき　南部　宇太

天の原小野ハ三寸のあらしの花　、如水

日ハ山に入て深くあらず蛙の艸　、一草

菜の花の葉に深き宵の空にかな　花琴

なかなかに月夜のあそびするふ　和棠

河の柳や田色の中に鳴雉子　江戸　、玉芝

見やるる尾をひきて枝の上　白雄

雉子の尾の小松に落ふ野風かな　南部　田蛙

若菜摘や笠見てひとり野に入　、友芝

等く行く野路の中の花　三千丈

山の井や走りてかける桃の花　陶々

梅さくらあふさく桃の手入かな　みちのく　英

松の緑色進でのちて以下の花　仙台　素嵐

色角して錦の孫うちかり郷の春　上毛　素十

世をもの小忘ゆもし春の庭　　豊水

松の花折々さすかハ云ふ好かり　　下総　如帛

江戸の花むし家多し松の花　　南部　春来

人恋し灯ともしころを桜ちる　　白雄

夜桜花のこころもすみける夜　　佛仙

桜ちる日を八夕なかりけり東子　　楞良

ちる花や手をさし出せハ手のうへ文　　五明

今は恋し暁くもの花のやう　　吾長

花の日の松さかりて雲の峰むかり　　長翠

ちる花の飛ぶより疾うあらしかな　　青蘿

花ゆくや桜の後に銭五文　　重厚

千本より一本の桜情あかし　　枝風五世　きく女

君か代や名利の人も花の陰　　心遂

冪もる雲の妻子経ても山さくら　　存阿

散や皆んなハ桜の木に向ける　　銚子　桃孫

花の人酔て自由をおほへけり　　南部　浮眠

何となくもかくるる見さき山桜　　仙台　一阿

旅の眼の夕さる桜やすめかな　　江都　跳壺

錦ふく秋て山ある夜より暮の空　京　石菓

兎角手紙嬉しくもさて雪の月　五粒

雪の花名月に出ん日本橋　一草

やとひもせ日傭より叢杝の
千住の柵に付ひて家の名残をあかむ
蜉蝣みち秋て膝のゆくもあゆむる
上野浅草のつほ寿にくれぬうて
日のかさふくまて物のさひき

ゆく秋や又街道を窓のまへ　成美

追加

冬の夜や座頭のまゝ雨とかる　成美

あふミ竹あくく清くる鴨哉　一草

出女笠の雛を笹振小浪揺く　長翠

招猫めくらす足跡さくら舞　美

秋風の月のうら照て吹払し　草

目も出る深さの貝つゝれ紅　翠

彫工　神田佐久間町　廣井平八

書肆